

《その他》

## 井上ひさしのメッセージからポルトガル語授業の 自家製例文を作る

Uma Tentativa Privada de Elaborar os Exemplos para as Aulas de Língua Portuguesa a Partir das Belas Mensagens de Inoue Hisashi, Dramaturgo e Escritor (1934-2010)

日 埜 博 司 (HINO Hiroshi)

キーワード 井上ひさし, 憲法第九条, 反レイシズム宣言, 「ことばの力」, 『きらめく星座』

2009年夏に垣間見る機会を得た UBI(ベイラ・インテリオール大学)における「外国人のためのポルトガル語夏季集中講座」については折にふれて書いたりしゃべったりしているが<sup>1</sup>, そこから持ち帰った所定のテキストを見てみると, 初心者向けながら, コラム記事として, いろいろな話題がイラスト入りで盛り込まれており, 眺めているだけで結構楽しい。

さらに, これはヨーロッパの学校教育に共通する特徴なのかもしれないが, たとえ初級教材であっても, ディベートやプレゼンテーションの場を提供しようとする編者

---

<sup>1</sup> 日埜博司「外国人のためのポルトガル語夏季集中講座見学の記——ベイラ・インテリオール大学とEU エラスムス・プログラム」『流通経済大学流通情報学部紀要』通巻27号, 2010年, 157～188頁。

の教育的意図が見てとれる。たとえば、子がいつ親から別れて独立するかについて、あなた自身やあなたの国はどうか、簡単な文章を読んだ後で、自由に議論しあるいは発表することを求めるのである(コラム記事からは、この件で、同じヨーロッパでも、ポルトガルと他の国々とは、一般的に、異なった傾向という社会的約束の存在するらしいことがわかった)。

とにかく、用いる表現がどんなに幼稚でも、手持ちの語彙でもって、可能な範囲でいいから、何とか「アタマの中にあることを、身振りを含めた表現を駆使してオモテへ出す」よう求めるという編者の狙いが感じられた。練習問題や例文など量も結構豊かで、初級テキストであっても、やる気のある者の意欲を充分満たしうる内容である。

私としては、平素から、本や新聞はもちろん、テレビ番組のルポルタージュ、ドキュメンタリー、インタビューに登場する名言やら名シーンやらに注目し、そこからなるべく多くの生徒に興味を持たせうような——つまり何よりも実質的内容と印象深さの伴った——ポルトガル語例文をひねりだす、という工夫を重ねている。ポルトガル語の担当パートナーである内藤理佳先生が、きっちり、丁寧に、所定のテキストに即した教え方をしてくれるからこそ、上記のような試みに心おきなく着手できる。

つい最近も、リオネル・メッシ選手を扱った NHK スペシャルからこんな例文を拾った(スペイン語を紹介しその語彙をほぼ機械的に変換すれば、いともたやすくポルトガル語文章が成立してしまう例としても、紹介できる)。

«La Pulga» es el mejor jugador del mundo con la camiseta del Barsa, pero hoy... (ノミちゃん  
はバルセローナのユニフォームを着ていれば世界一のプレーヤーなのだが、しかし、きょう  
は、ねえ……)

これをポルトガル語へ変換すれば――

«La Pulga» é o melhor jogador do mundo com a camiseta do Barsa, mas hoje...

メッシ選手は子どもの頃、身長が伸びず、ものすごく高価な成長ホルモンを注射し続けなければならなかったそうだ。今も身長 169 センチメートルというから、私とほとんど変わらない。つまり futebol 選手としては(ちなみに、この futebol という語彙であるが、英語の football を音訳したものであって、ポルトガル語本来のものではない)背が低い。その彼にいくら愛称とはいえ「ノミちゃん」はちょっとひどいと思うが(ただし、ゴール前で軽快に跳ねるが如く相手の防御をかかわすメッシのイメージは、自分の体長をはるかに超えるジャンプをするというノミのイメージと重なるような気がしないでもない)、この記事は、アルヘンティーナ(アルゼンティン)のナショナルチームの一員としてはメッシがあまり機能していないことへの、かなり強烈な批判であり皮肉である<sup>2</sup>。

---

<sup>2</sup> これに関連した感情的な悪罵のつもりなのであろうが、こんな見出しも紹介された。«Él no sabe cantar el hino»。「ヤツは国歌すら歌えない」。これをポルトガル語へ直すとこうなる。«Ele não sabe cantar o hino»。ポルトガル語(やスペイン語)では、能力や技能がある(ない)から「～できる」「～できない」場合と、環境や状況のせいで「～できる」「～できない」場合とで、動詞不定法の前に置く助動詞を区別する(前者は「saber+不定法」、後者は「poder+不定法」)。上掲の文はこの微妙なニュアンスを教えるのに好適だ。

もうひとつの例は下記のような。

2006 年度以降私のポルトガル語を聴いてくれた学生なら、皆、2006 年にドイツで行なわれたワールドカップの準々決勝イングランド対ポルトガル戦を覚えているはずだ(PK 戦によるポルトガル勝利の瞬間のヨロコビにひたって、バンザイ三唱して、授業オシマイ、なんてことは、断じてやっておりませんので、念のため)。

大事なのはむろん試合内容ではなく、準々決勝ゲーム前のセレモニー。両国主将によって行なわれた——つまりベッカムが英語で、フィーゴがポルトガル語で行なった——「反レイシズム」宣言である。試合中はもちろん試合後も、人種偏見と人種差別に関わるいかなる言動もとらぬことを誓う、という趣旨を読みあげた後、宣言をベッカムは «Say No to Racism.», フィーゴは «Diga Não ao Racismo.» と、それぞれ締めくくる。

不規則動詞 *dizer* の叙実法 1 人称現在  *digo* (私は言う)からの類推で,  *diga, digas, diga, digamos, digam* という叙想法の活用(前記ポルトガル語集中講座で使用された初級テキストには、日常生活で使用頻度のきわめて低い 2 人称複数が一律的に省略されていることを踏まえる。ただし、ブラジルのポルトガル語と異なり、2 人称単数はポルトガルではどうしても欠かせない)がイモヅル式に導き出され、丁寧な命令文はこれで表現できます… …なんていう説明は、もうどうにお忘れでしょうが、前記 «Diga Não ao Racismo.» は発音を含めて自信あり、というヒトは多いのではなかろうか(無理か)。

日本は、いわゆる「人種差別撤廃条約」に加盟している。その正式名称は「あらゆる形態の人種差別の撤廃に関する国際条約」。1965 年 12 月、第 20 回国連総会で

採択され、1969年に発効した。日本は1995年12月、あろうことか146番目(!)の締約国として加入した(翌96年1月に発効)。

ただし日本政府は、条約の批准に際し、国内法の整備を求めた第四条の適用を留保し、今に至っているのだとか。条約締約国は、第四条に従い、たとえば、「アウシュヴィッツの嘘」を罰することにした戦後ドイツにおけるように、人種差別の扇動助長につながるような言動を刑法で処罰する仕組みを整えるよう要求されているのであるが、日本政府は、それをやる気はさらさらないらしい。

石原慎太郎が公人(東京都知事)として行なったひどいレイシズム発言を指摘されて開き直ったり、政治家が民族差別(あるいは蔑視)発言をやらかしても恬<sup>てん</sup>として恥じなかったりする、そのための抜け道がシッカリ用意されているわけだ(この種の発言を「表現の自由」に属するものと強弁するかしないか、民主主義の成熟度を測る尺度という以前に、“国家の品格”に関わることだ、と言ってよかろう)<sup>3</sup>。

人類史の汚点というべきアパルトヘイトを克服してワールドカップ(Copa do Mundo)開催にこぎつけた南アフリカ共和国。ブラジルもポルトガルも早々に惨敗したので、がっくりきていたところに、「教養諸学」という科目を受講しているある学生から届いたレポートにこんな文言が添えてあった。日本がもし準々決勝へ進み、センセイが紹介した「反レイシズム宣言」を長谷部主将が日本語で読み上げることになったら、

---

<sup>3</sup> この問題については、内海愛子/高橋哲哉/徐京植編『石原都知事「三国人」発言の何が問題なのか』(影書房、2000年)所収の諸論文のうち、特に梶村太一郎「精神の放火犯」を参照した。

どんな日本語が聞けたらろう、と。日本代表には全然関心なかったのだから(それ以上に、スポーツバーやら街頭でさんざん聞かされた、ニッポンニッポン——ああいうときに、ニホンニホン、と言わないのは、何となくおかしい。刺戟が少ないからかな——の連呼がやかましく気色悪くしょうがなかったのだから)、ついつい思い至らなかったが、確かに、長谷部による日本語での反レイシズム宣言、それだけはぜひ一度聞いてみたかった。

異なる民族、種々の価値観、もろもろのマイノリティーとの共生。exclusion(排外/排斥。ナカマハズレ)ではなく inclusion(包容/包摂。トモダチの輪)の理念が浸透した社会の構築。これ以外に、日本が生き延びてゆくすべはもうとつくになくなっていく——と私には思われる——のに、ウチらの国はそれを自覚しているのかどうか……

ともかく、その日本が準々決勝に進んでいけば——そしてあの宣言を日本語で行なう名誉に加わっていたら——、レイシズムの何たるか、をちっとは考えるきっかけになったかもしれないな(知性的で読書家といわれる長谷部なら、堂々たる宣言をやったのけたであろうが)。

NHK スペシャルの『プロジェクト・ジャパン』というシリーズで、非戦思想の系譜を辿る番組が放映された。オープニングに、スペイン領カナリア諸島を構成するグラン・カナリア島の遠景が映し出され、やがて、テルデという街にある「ヒロシマ・ナガサキ広場」へ映像が切り替わる。驚いたことに、そこに日本国憲法第九条イスペイン語訳の碑が立っている。カナリア諸島には NATO(北大西洋条約機構)の軍事基地があり、わが沖縄と同様、ヨーロッパ本土に比べ偏った軍事的重荷を背負わされて

いる。当然、地元住民の不満は根強く、住民投票で基地撤去の意思が示されたこともある(実現はしていない)。そのスペイン語訳をテレビの画面から読んでみると

——

### Plaza Hiroshima y Nagasaki

El pueblo japonés, que aspira sinceramente a una paz internacional fundada en la justicia y el orden, renuncia para siempre a la guerra como derecho soberano de la nación, y a la amenaza o al uso de la fuerza como medio de resolver conflictos internacionales.

Con objeto de dar cumplimiento a los designios del párrafo anterior, la nación nunca dispondrá de fuerzas armadas terrestres, marítimas o aéreas, ni de ningún otro tipo de potencial bélico. No se reconocerá el derecho de beligerancia del Estado.

これを見たとき、ああ、これはただちにポルトガル語へ直して、自家製の例文に加えなきゃと思った。難しい語彙が使われてはいても文章としては完璧であるから、暗誦したり音読したりするのもちょうどいい(そういえば、この暗誦やら音読やらの習慣、今の学生たちはからきし持ち合わせていないようだ。ただし「イマノガクセイは」だの「日本人は」だの、何につけ、対象を不用意に一般化する愚は、平素極力回避しているつもりだから、逆の証拠が上がれば、前言はいつでも撤回する)。

少々長く難しいことは確かだが、これは私たちの憲法である。何が書いてあるのかはハナからわかっているはずだし、わかってないなら、この際、それくらい覚えさせてバチは当たるまい。今の大学生の過半は、ゆとり教育マッサカリの時期に中等教

育を受けたいわば教育難民, といつか, そのギセイ者, と言っていいからだ。例によつて, アナ・リタ・カリーリョ先生のチェックとお教を仰いだうえで, 下記のようなポルトガル語訳を作成してみる。

### Praça Hiroshima e Nagasaki

O povo japonês, que aspira sinceramente a uma paz internacional fundada na justiça e ordem, renuncia para sempre a guerra como direito soberano da nação, e a ameaça ou o uso da força como meio de resolver conflitos internacionais.

Com o objectivo de cumprir os desígnios do parágrafo anterior, a nação nunca disporá de forças armadas terrestres, marítimas, ou aéreas, nem de nenhum outro tipo de potencial bélico. Não se reconhecerá o direito de beligerância do Estado.

«aspirar» という動詞について言えば, 前置詞 «a» を従えるかどうかで意味が異なってくる。これを従えないとき, 「ホコリなどを掃除機で吸い込む」という行為を表わす (例, Ele aspira o quarto todos os sábados. 土曜日ごとに部屋を[掃除機で]掃除する) のに対し, 従えるときは, 上掲のポルトガル語訳で表わされるような意味, つまり「何かを為しある目的を達成しようとする願望もしくは意思を持つ」という意味に変わる。

参考までに日本国憲法第九条をここに採録しておく。

日本国民は、正義と秩序を基調とする国際平和を誠実に希求し、国権の発動たる戦争と、武力による威嚇又は武力の行使は、国際紛争を解決する手段としては、永久にこれを放棄する。

前項の目的を達するため、陸海空軍その他の戦力は、これを保持しない。国の交戦権は、これを認めない。

毎年新生に配る小冊子に全教員がそれぞれ一読を勧める本を簡単に紹介する欄がある。紹介する本のスペースは2冊分。どうしてもなく少ないけれど、紙面の制約と言われればやむを得ない(何かの手違いと思いたいが、それすら空白にしてあるという恐るべき例を見た。冊子名は『読書のすすめ』であるから、こういう不作為はブラックユーモアと呼ぶにふさわしい。新松戸の駅で本好きの会社員に拾われてもしたら……)。

そこに私は、井上ひさし著『井上ひさしの子どもにつたえる日本国憲法』(絵 いわさきちひろ、講談社、2006年)を紹介した。わが憲法の前文と第九条とが「小学生にもわかるよう」読み替えてある。硬い表紙の本だが、ページ数は少ない。井上のパラフレーズ(読み替え)が、いわさきちひろの素敵な絵の中で語られると、よりいっその魅力と説得力とを帯びてくるから不思議だ。そこで井上が小学生のため第九条をどのように読み替えたのか、を見てみる。

もう二度と戦はしない(第九條)

わたし <sup>にんげん</sup> い <sup>かた</sup> <sup>とうと</sup>  
私たちは、人間らしい生き方を尊ぶという

まことの <sup>せかい</sup> <sup>ねが</sup>  
まことの世界をまごころから願っている

<sup>にんげん</sup> <sup>い</sup> <sup>き</sup> <sup>たいせつ</sup>  
人間らしく生きるための決まりを大切にする

<sup>せかい</sup>  
おだやかな世界を

<sup>ねが</sup>  
まっすぐに願っている

<sup>わたし</sup>  
だから私たちは

<sup>お</sup>  
どんなもめごとが起こっても

<sup>ぐんたい</sup> <sup>ぶ</sup> <sup>き</sup> <sup>ちから</sup>  
これまでのように、軍隊や武器の力で

<sup>かた</sup> <sup>えら</sup>  
かたづけてしまうやり方は選ばない

<sup>ころ</sup> <sup>ころ</sup>  
殺したり殺されたりするのは

井上ひさしのメッセージからポルトガル語授業の自家製例文を作る

にんげん い かた かんが  
人間らしい生き方だとは 考 えられないからだ

くに じぶん まも  
どんな国も自分を守るために

ぐんたい も  
軍隊を持つことができる

わたし  
けれども 私たちは

にんげん ゆうき  
人間としての勇気をふるいおこして

くに  
この国がつづくかぎり

たちば す  
その立場を捨てることにした

どんなもめごと

すじみち かんが  
筋道をたどってよく 考 えて

ちから  
ことばの力をつくせば

かならずしずまると信じ<sup>しん</sup>るからである

よく<sup>かんが</sup>考えぬかれたことばこそ

わたし<sup>わたし</sup>私たちのほんとうの<sup>ちから</sup>力なのだ

そのために、<sup>わたし</sup>私たちは<sup>いくさ</sup>戦を<sup>ちから</sup>する力を

<sup>も</sup>持たないことにする

また、<sup>くに</sup>国は<sup>たたか</sup>戦うことができるという<sup>たちば</sup>立場も

みとめないことにした

ここには、第九条本文に実際使われているわけではない文言が、多く含まれる。この読み替えが井上独自のものであるとしても、戦争放棄を裏づける理念はよく——しかも正しく——子どもたちへ伝わるだろうと思われる。

井上は記す。「人間には残虐な面があることはたしかですが、言葉を持ち、その言葉で気持ちや考え方を交換し合う能力があります」と。そして近頃、この第九条の中身が古くなってきた、という意見に対し、井上は次のように反論する。

いったい、もめごとがあっても武力ではなく話し合いで解決しようという考えのどこが古いのでしょうか。このせまい小さい水惑星の上で、むやみやたらに火薬を爆発させていたら、しまいには人間が住めなくなる。だから戦などしている余裕はない。なんとかしてすべてを話し合いで……！ たいていの人がそう願っています。そうすると、私たちの憲法は古いどころか、世界の人たちの願いを先取りしていることになります。

「言葉を持ち、その言葉で気持ちや考え方を交換し合う能力」。憲法第九条の井上による読み替えとそれに対するコメントを反芻しているとき、ちょっとした珍事が起こった。

ある日の授業(基礎演習)で、世界にはさまざまな風俗習慣があり、善があり、倫理があり、道徳観念さえ相対的である、というハナシをするに際して、モーセの第六誡に関する 17 世紀日本人キリシタンのおんげ(告解)ポルトガル語訳に対する日本語補注を作成したときに用いたある図版を紹介した。

日本の農村で五穀豊穡の予祝儀礼として行なわれた“奇習”を面白可笑しく描いたもの。<sup>はるのぶ</sup>春信春画(正しくは笑い絵)の傑作のひとつだ。「異なり(=稲荷)の末社、よがらすの神」を名乗るペテン師が、天狗の面を着けて、田植えにいそむ百姓夫婦のもとを訪れ、娘を差し出せば働かずとも「百俵の稔り」を約束するぞ、と夫婦を丸めこむ。ペテン師は、夫婦の目の前で、娘とけしからぬ行為に及んでいるのだが、これをお稲荷さまの使い、と手もなく信じた亭主は、この申し出に感激、ムスメばかり

かうちの「婆め」も捧げますと、手を合わせ、お稲荷さまへとりなしを乞う、というハチヤメチャな場面(詞書で、男は、夫婦からの懇願に応え、「ア、よきかなよきかな。明日もこんこん」などと、ふざけている。日本人は笑いとユーモアを解さぬ「チョンマゲ居士」と、ともすれば自嘲したり、よそ様から、さりげなく馬鹿呼ばわりされたりするが、この春信のセンスはどうだ。笑いとユーモアがわからないなんて、そんなの日本人の不変的〔?〕伝統ではない)。

日本の田植え祭りで見られるこれに類した営みは、古来、農山村の構成員が五穀豊穡をあらかじめ<sup>ことほ</sup>寿ぐために執行した神聖な儀礼にほかならない。他方、カトリックの性倫理は、婚姻の秘蹟によって契り合った正当な一夫一妻が「種の保存」という明確な目的意識をもって行なわれる性交のみを一種の必要悪(!)として認めた、だからこそ、カトリック司祭にして『さんげろく』の編者コリヤードも、17世紀禁教下の日本へやってきて、第六誠に違背する習俗のあまりの多様さに肝を潰し、この誠に関し、他の誠と比べ、きわだって多くの告解を採録せざるを得なかった……<sup>4</sup>、とまあ、そんなハナシを——大マジメに——したところ、ある男子がそれをヒワイだとか言って、その筋に匿名で訴えたというのだ。

このようなカマトトが存在すること自体、まあ、タデ食う虫も何とやら、であるからハラを立てることもあるまいが(珍事であるから、驚いてはいるけれど)、マジメで闊達な議論に妙なプレッシャーをかけこれを圧殺しよう——そんなつもりはないと言っても、実質的な議論の封じ込めが行なわれないという保証はない——とするのは、マズイ。

---

<sup>4</sup> 日笠博司『コリヤード 懺悔録』ポルトガル語全訳注——第六誠「邪淫を犯すべからず」に対する若干の日本語補注『流通経済大学論集』通巻164号、2009年、125～126頁。

マズイというより、コワイ。いかにコワイか、てんでわかっちゃおらぬことが、いちばんオソロシイ(採用に踏み切れば、キチンとした言葉を用いての意思のやりとりもヘツクレもなくなるに相違ない教科書デジタル化——2015年か——の悪夢を先取りして見ているような気分)。

私はすべてのゲンセツに関し、書くものはもちろんのこと授業においてすら、ややうるさいくらいに典拠の明示を励行している。「オモシロオカシク」とは心がけるけれど、記述なり発言なりにちゃんと典拠のウラがあることを示したくて、毎度、その典拠となった資料をプリントにしていやでも配る(ちっとは活字に親しんで欲しいと切望するから。こんなの初めてとかスゴすぎるとか何とか言って、後生大事にファイルしてくれている連中もいるし。彼らの多くは、小さい頃から、これしちやいかん、それ書いたらあかん、あれ言うたらだめと、何と言えはいいのかわ、減点主義とでも名づけたらよさそうな教育を受けてきたのだから)し、アヤシゲな私の話もまんざらウソではないことを示すため、典拠になりうることを確信した映像も、実際に見せる。デリケートな話柄であればなおさらだ。

私は「ことばの力」を信じたいと願う者であるから、カマトトからでも求められれば、いつでも——重ねがさねの——御説明に伺うが、ゴンベが相手では対処のしようがないね。

まあいい、ぶつくさ言ってもはじまらぬ、上記の如き話題をヒワイ呼ばわりするなら、お田植え神事として、毎年2月の第1日曜日、奈良県明日香村の飛鳥坐神社であすかこいます

行なわれる日本三大“奇祭”のひとつ「おんだ祭」を今度、じっくり見学してきたらどうだ。

「おんだ祭」で行なわれるパフォーマンスを「おおらか」と見るか「ワイセツ」と見るか、は見る者の勝手である。私は、これを「ワイセツ」と決めつけて<sup>はばか</sup>憚らぬ人をコマッタ仁だなあ、とは思うけれど、おかしいから改めなさい、なんて居丈高に声をアララゲるつもりもない。

この祭りのパフォーマンスがどのようなものであるかは、川村邦光「性の民俗——ワイセツの近代」に要領よくまとめられているので(写真も掲載されているぞ)、ここでの引用を避ける<sup>5</sup>。

と、上記のような体験をし、「日本もすみにくくなりましたなあ……」<sup>6</sup>というふうなことをぼんやり考えていたとき、1985年に初演された井上ひさしの芝居『きらめく星座』<sup>7</sup>を、改めて見た。

---

<sup>5</sup> 赤坂憲雄/中村生雄/原田信男/三浦佑之編『いくつもの日本 VI 女の領域・男の領域』岩波書店、2003年、253～255頁。

<sup>6</sup> 『天才バカボン』の連載第一回「わしらはバカボンだ」(『週刊少年マガジン』1967年4月9日15号)で、いたずら好きに、服を着たまま風呂に入ると死刑になるそうですよ、と言われたパパが着衣のまま銭湯の湯船に入ろうとしてつぶやいたセリフ。ハダカで闖入したおまわりさんの説教で、スーツ姿のいたずら好きは湯船の前でパパに謝るが、わしに謝ることはないと言ってパパは銭湯を出、たまたま通りかかった洗濯屋にトンチンカンな謝罪をする——洗濯に出そう

地球という「ほどのよい気温と豊かな水に恵まれた惑星」が、宇宙に存在すること自体「奇蹟」であるのに、その「水惑星」に「わたしたちがある、いま生きてあるといふだけでもうそれは奇蹟の中の奇蹟」だ——。日米開戦前夜、仕合わせになれそうもない子を産むことに絶望し宿った命をおろそうと企てるレコード屋の娘に向かい、広告文案家を名乗る竹田(すまけい)が、上記の主旨の長いセリフで芝居をクライマックスへ導く。そして静かに結ぶ。「だから人間は生きなければなりません」。井上戯曲を代表する名場面のひとつだ。

亡父(1923年生まれ)は繊維会社に勤めるサラリーマンであった。読書三昧の暮ら<sup>ざんまい</sup>しを本当はしたかったらしいが、家庭の事情がそれを許さず、生きてゆくに困らぬ職を身につけるため大学へゆくかわりに大阪の工業学校で染色を学んだ。詳しい経緯は聞き渡らしたが、父は日本軍政下のスマトラへ遣られた。

ビルマやフィリピン、ニューギニアやガダルカナル、アッツやキスカ、その他もろもろの激戦地に比べれば、父の送られたスマトラは極楽同然であったらしい。スマトラで染色の技をどう生かしたのか知らないが、結局、大した戦闘や飢餓や、そして何より幸運なことに、“玉碎”という同胞虐殺に遭遇することもなく、好奇心とヒマ(?)に飽かせて、インドネシア語を自修してしまった。

---

としていた着衣が湯船の中でキレイになってしまったから——というところがこの回のヤマ(赤塚不二夫『天才バカボン①』竹書房文庫, 1994年。『赤塚不二夫名作選②天才バカボン』小学館文庫, 2005年)。

<sup>7</sup> 活字化された脚本は『井上ひさし全芝居 その四』(新潮社, 1994年)に収載される。

列記したような激戦地で、どんな「生き地獄」が現出したか、私は今それを、具体的に知っている——80代終盤から90代になってしまった生き残りの人々の証言によって。それに反して、父は幸運というほかなかった。送り込まれた先がほんの数百キロ、数千キロ「ずれた」だけで、父は、たとえば、熱帯の密林で極限状況に追い詰められたすえ死んだ戦友の尻の肉を食ったり、爆弾をカラダに巻き敵戦車の下に潜り込むことを強制されたり、ガマの暗闇で泣きわめくわが子の首にカミンリを突き立てたり……なんてことをしないで済んだ。アリティイに言えば、紙くず国債を買わされインチキ貯金まで強制されて太らせてやった“日本”のために殺されることを、あやうく免れた。

「人間は奇蹟そのもの。人間の一挙手一投足も奇蹟そのもの」

亡父の任地が「生き地獄」から少しずれていたのが奇蹟なら、今ワタシがここにこうして在ることも、まあ——憚りながら——奇蹟だなど、通常の感性を働かせれば、イモヅル式に理解できる。

“日本”にダマされた生身のニンゲン——とりあえずニホン人に限定しておく——が“日本”からナマゴミのように捨てられたとき、具体的かつ視覚的にどんな姿へ化けるのか——。ぐちゃぐちゃにされた死体——のリアルな映像——こそ、この悲惨を二度と繰り返させるな、という訴えを、奇蹟のうちに「いま、ここにкауしてゐる」私たちへ、無言のうちに、しかし必死で送っていると、私は信ずるのだ。

ところが——案の定というべきか——数年前、ある学生から直接、あんなザンコクなものもう見たくないし見せないでくれ、という声が出た(誰が仕切っているのか、反リアリズム中等教育のみごとな“精華”として、役人は喜んだほうがいい)。

やれやれ。私は仕方なく、やめろというならやめてもいいが、フィリピンの密林で極限の飢餓に追い込まれついに人肉に手をつけた兵士と、そのような行動をとるような兵士を追い詰めたくせにオノレはのうのうと生き延び、戦後はその責任逃れに終始したおエラがたと、どっちが本質的なザンコクか、それくらいは想像力を働かせて考えたれや(もう、ステゼリフ)、と言ってやった記憶がある。

こっちの訴えの主はしかし、幸いにも、ゴンベではなかった。ゴンベではないから、言葉を伝える可能性がある、伝えるための努力も払える。で、私の意図するところが了解されたのかどうか知らないが、彼は後日(ゼミ生でなくなってからずいぶん経つて)、世界の旧紛争地帯やら、ポルポト大虐殺の爪痕やらを NGO のメンバーとして巡遊してきたという社会学部生を、わざわざ私のもとへ連れてきた。だから、納得したのであろうと勝手に考えている。

伝えたいことを「ことばの力」を信じて伝える。それが叶うかどうかは別として、最善を尽くす——。考えてみると、主として大航海時代にポルトガル語あるいは日本語で記述された文書や史料を日本語へあるいはポルトガル語へ——双方向的に——翻訳し、それに注釈を施すという作業は、まさにこれだ。

井上ひさしの追悼番組(NHK 総合で 2010 年 4 月 25 日に放映された『さようなら 井上ひさしさん』)で井上のすばらしい言葉にまた出逢った。冒頭の画面に井上の自筆が映し出され、大竹しのぶが朗読した。画面から載録し、ポルトガル語へ直し、自家製の例文に加える。

むずかしいことをやさしく      Escrever o que é difícil de modo fácil,

やさしいことをふかく      Escrever o que é fácil de modo profundo,

ふかいことをゆかいに      Escrever o que é profundo de modo divertido,

ゆかいなことをまじめに      E escrever o que é divertido de modo sério.

書くこと